

令和5年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（「学力・学習状況」検証事業）研究状況報告書
長南町立長南中学校

1 学校紹介

長南町は房総半島中央部に位置し、自然豊かで景観の美しい町である。少子高齢化、過疎化が急速に進んでおり、課題となっている。

本校は、昭和36年に長栄中学校と東西中学校を統合して町内唯一の中学校として開校した。平成29年度から町内4小学校の統合により、長南小学校が本校の敷地内に新設され、小学校を併設した小中一貫型授業が開始となる。令和4年、町規則施行により、小学校併設型中学校となった。

男女の仲が良く、協調性に富み、性格も温和で素直な生徒が多い。「郷土を愛し、未来を拓く創造的な知性と体力を身につけた心豊かな生徒の育成」を学校教育目標とし、教育活動を行っている。

2 研究主題

「主体的に学び表現する生徒の育成 ～根拠を明確にして書くことの学習を通して～」

【仮説】

一人一人が自分の考えを明確にするために、言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成する場や学び合う場を設定すれば、主体的に学び表現する生徒が育つだろう。

3 研究の概要

(1) 生徒の実態と課題

① 令和4年度「全国学力・学習状況調査」より（令和4年4月19日実施）

ア 千葉県・全国と比較し、国語の点数はほぼ同点である。

イ 観点別に見ると、「読むこと」「書くこと」の観点が下回っており、短答式や選択式の正答率は全国平均に比べて高い。

ウ 記述式問題が無解答となる生徒が極端に多い。

② 同調査の質問紙より

ア 「国語の勉強が大切」「国語の授業の内容が分かる」「国語の勉強が好き」「国語は将来役に立つ」等、国語の学習に対して肯定的に捉えている生徒が多い。

イ 「自分の考えをうまく伝えるよう資料や文章、話の組み立てなど工夫して発表していたか」「自分の思いや考えをもとに、作品や作文など新しいものを創り出す活動を行っていたか」から、自分の考えを書いたり、発表したりする活動が不足していたことがわかった。

③ 令和4年度「千葉県標準学力検査」より（令和4年3月実施）

国語については、すべての学年が県平均をやや上回り、基礎・基本が定着していることがうかがえる。また、どの観点も県平均から大きく下回る観点はなかった。

④ 普段の学習の様子より

ア 真面目な学習態度で、落ち着いて学習に臨んでいる。

イ 文章によって説明したり、自分の意見を書いたりすることに苦手意識をもった生徒が多く、感想や作文を書かせたときには、「何をどのように書いていいのかわからない」という生徒も見られる。

以上のことから、本校生徒の課題として、「書くこと」におけるこれまでの学習経験の少なさが、自分の考えについて、根拠を挙げたり構成を工夫したりして表現することの苦手さにつながっていると推測できる。

「書く力」を高めるためには、まず「何を問われ、何を書くべきかを生徒自身が理解する」必要がある。その上で、「自分の考えをもたせる」ことが大切である。各教科において「なぜ、そのように考えるのか」根拠を明確にもたせ、条件に合わせて書く経験を積ませていきたい。

(2) 学力向上のための取組

① 全職員による取組

ア **校内研修Ⅰ**「主体的に学び表現する生徒」をどのように育成するか。(令和5年5月16日実施)

東上総教育事務所より指導主事を招聘し、「教科等横断的な視点と学力向上について」の講話を頂いた。「学力向上」のためには、特定の教科だけで取り組むのではなく、学校組織全体で取り組むことが大切であること、また、「全国学力・学習状況調査問題」を解くことで、「今、求められている資質・能力」とは何かを明らかにすること。教科等横断的な視点で授業改善に取り組むために、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』の活用を充実させること等、共通理解を図った。

この研修後に行ったアンケートから、以下のことがわかった。

- ・ ほとんどの教員が授業で「書く活動」を取り入れていたが、質や量の観点から考えると「根拠を明確にして書く活動」までは行えていなかったことに気付いた教員もいた。
- ・ 自身の教科指導の中で、具体的にどのような活動ができそうかを質問したところ、「口頭で根拠を元に説明する活動を行う」「文章を書かせるときに、ポイントとなる点を書き出させる」「レポート作成を積極的に取り入れていく」等が挙げられた。

校内研修Ⅱ「令和5年度 全国学力・学習状況調査の分析 (令和5年10月16日実施)

本校生徒の正答率が低かった国語の問題を全職員で解き、どのような資質・能力が今求められているかについて分析し、共通理解を図った。その後、教科ごとに集まり、自身の教科でどのような取組ができそうか、授業改善の方策について話し合った。他教科の問題を解くことで、「生徒たちの困り感を知ること」「情報活用能力の必要性」「複数の資料を総合的に見て比較する等、違いを見取る力をつけていくこと」に気付くことができた。



イ 思考を広げるためのICTの活用

話し合いの根拠を集めるための調べ学習として、1人1台端末やパソコンを活用する。また、「個の考えを全体で共有するための思考ツール」として、「オクリンク」や「ムーブノート」等のアプリケーションを活用し、自分の考えを明確化するきっかけとする。

ウ 「振り返りシート」の活用

「この授業で学ぶことは何か」「どのような力を身に付ければよいか」が明確となった学習課題を把握することで、「わかったことやできるようになったことは何か」「わかるために、どのような工夫を試みたか」等、自身の学びについて具体的に振り返る機会を作る。

② 国語科による授業実践

ア 1年生 「星の花が降るころに」～続編を書こう～

- ・ 続編の条件として、「登場人物を変えない」「場面を一つ設定する」「比喻表現を使う」ことを約束事とし、これら进行分析する際の着目点と位置付けた。
- ・ 根拠となる「効果的な比喻表現」を使うにあたり、「デジタル教科書」を活用し、様々な比喻表現を見つける活動を行った。
- ・ 「物語の構想を立てる」際には、教師モデルを作り、「オクリンク」を活用して生徒に提示した。
- ・ 「書く活動」では、生徒自身が「タブレット入力」か「手書き」かの選択をし、各自にとって最適な学習方法を選べるようにした。

イ 2年生 「根拠の適切さを考えて意見文を書こう」 【指導案：別添資料】

- ・ 説得力のある意見文を書くために、意見文のテーマについてマッピングを活用し思考を広げた。
- ・ 説得力のある意見文にするために、インターネットを活用して根拠となる素材を集めた。
- ・ 自分の考えの根拠を明確にするために、観点を多角的に捉えた教師モデルを提示し、分析した。
- ・ 「構成メモ」を作る際には1人1台端末の「オクリンク」を活用し、説得力が高まる文章構成について検討した。

ウ 3年生 「多角的に分析して書こう」

- ・ 複数の「茂原七夕まつり」の広告を教材として、対象とする事柄の特性や価値などについて客観的に分析し、自分の考えをまとめた。
- ・ それぞれの広告を分析したことについて意見交換（批評）を行った。
- ・ 構成表を元に批評文を書き、観点に基づいて推敲をし、清書を書き上げた。

（3）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

学力向上のための取り組みの一つとして、「少人数指導」を実施した。既習学習の習熟度による学力の違いから、生徒個々が課題とする内容は多岐にわたっている。そのため、T・Tによる授業を展開し、困っている生徒への指導・助言を行った。その結果、どの生徒も自分の考えを意識した学びや、根拠を明確にして自分の考えを伝え合う場面を増やすことができ、きめ細やかな支援体制を確立することができた。



4 成果

(1) 全職員による取組

ア 全職員による校内研修をしたことで、「学力向上」のためには、特定の教科に任せるのではなく、学校組織全体で取り組むことが大切であることに気付き、共通理解を図ることができた。また、他教科の問題を全職員で分析したことで、多角的な視点から多くの気付きを得ることができた。どの教科でも「根拠を明確にして書く活動」を意図的に位置付けるきっかけとなった。

音楽科の授業では、表現の工夫点を発表させる際の根拠を求めたところ、歌詞だけではなく音楽記号等にも着目する生徒が増えた。

社会科の授業では、自分の考えをまとめる際、明確な根拠を探すためにICT機器を活用したが、他者が納得するように、違う立場の考えを想定することや、メリット・デメリットの両面にふれることなどを求めたところ、多面的に物事を捉えようとする姿勢が身に付いてきた。

イ 思考を広げるためのICT機器の活用

友人の考えが容易に共有できたため、話し合い活動が充実した。自分の考えが明確になり、生徒は意欲的に学習に取り組むことができた。ミライシードにより提出した作品を評価し、さらにより良いものにするための再考を生徒に促す教員もいた。また、ICT機器を活用することで、「書くこと」を苦手とする生徒にとって、学びやすい環境になった。

家庭科の授業では、「実物見本」と「製作の過程を撮影した動画」を用意し、電子黒板を活用したところ、自身に今必要なことを捉え、自己の課題に合わせて学びの調整を図る生徒が出てきた。

体育科の授業では、タブレットを活用した学習を取り入れたことで、動画で自分の動きを撮影して確認をしたり、手本を視聴することで自身の体の動きに反映させようとしたりする姿が見られた。



ウ 「振り返りシート」の活用

学習のまとめや振り返りを自分の言葉で書いて蓄積することで、生徒自身がわかったことや課題の分析、思考の広がりについて認識することができた。学習の足跡を残したことは、学習内容の定着にもつながった。また、「次時は〇〇ができるようにしたい」「家で△△に取り組んでくる」等、主体的に取り組む生徒が見られた。

体育科の授業では、「何を意識したか」「やってみてどうだったか」「次回はどのようなところに気を付けるか」を意識して記入させると、具体的な反省を書ける生徒が増えた。

(2) 国語科による授業実践

- ・ 書くことの目的が明確となった言語活動を位置付けたため、主体的に表現する生徒が増えた。
- ・ 教師見本を提示して分析したことで、学習の見通しをもって取り組む生徒が増えた。
- ・ 『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』の4つの学習過程を位置付けたことで、主体的に学習を進めることができた。

教科研究主題

主体的に学び表現する生徒の育成 ～「根拠を明確にして書くこと」の学習を通して～

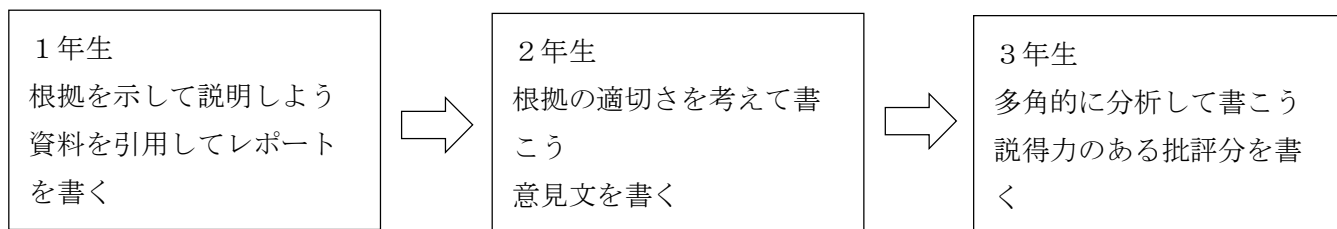
1 単元名 根拠の適切さを考えて意見文を書こう

2 単元について

(1) 単元観

本単元では、適切な根拠を考えることに重点を置き、説得力のある意見文を書くことがねらいである。意見文は、ある事柄や問題などについて、根拠を示しながら自分の考えを筋道立てて述べる必要がある。体験などを通じて、自分の心の中で感じ取ったり思ったりしたことを表す感想文にとどまってしまう生徒には、客観性の高い信頼できる情報やデータを示したり、複数の根拠を示したりすること等を助言していく。また、意見に当たる部分と、それを支える根拠となる部分を分けて書くように指導していく。明確な意見文にするためには、伝えたい意見が明確であることはもちろんのこと、意見とそれを支える根拠とのつながりを明確にすることが重要である。読み手の立場に立ち、どのような順で書けばわかりやすく伝わるのか、構成の工夫も考え。意見文は、学校生活はもちろん、日常生活の中でも触れることが多く、「自分がそう思う」というだけでは説得力のある意見文にはならない。意見の根拠を吟味する習慣が、今後の学習や日常生活につながることに気づかせる。

(2) 指導内容の系統性



1年生「根拠を示して説明しよう」では、人に何かを説明するためには説得力のある根拠を示すことが重要であることを学んだ。また、レポート作成に当たり、資料を引用して書くことを学習した。それを受けて、2年生では、自分たちの日常生活を振り返る中で生まれた願いを意見文として書くという活動を行う。自分の伝えたい意見に対して、適切な根拠であるかどうかを分析しながら文章を書くことで、自らが伝えたい考えをわかりやすく表明できる生徒を育てていく。

3 単元の目標

(1) 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解することができる。

〔知識及び技能〕

(2) 根拠の適切さを考えて説明や具体例を加え、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕

(3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとすることができる。

〔学びに向かう力、人間性等〕

4 指導計画

実践モデル過程	時	学習活動	観 点 別 評 価 規 準		
			知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
見いだす	1	○単元の見通しをもち根拠の適切さを吟味する方法を学ぶ。	○意見と根拠、具体と抽象など、情報と情報との関係について理解している。	○意見と根拠のつながりを明確にした文章の書き方について理解している。	○これまでの学習を活かし、積極的に意見と根拠の関係について理解しようとしている。
	2	○自分の意見をもつために、マッピングで意見文の課題を考える。	○具体と抽象の関係に着目し、マッピングを広げている。	○根拠の適切さを考えて、自らの考えを説明したり書いたりしている。	○これまでの生活を振り返り、関心のある事柄について粘り強く見つけようとしている。
自分で取り組む	3	○集めた情報を整理して、根拠となる内容について分析する。	○自分の意見を支えるために必要な適切な根拠を見つけている。	○根拠となる事実を具体的に書いている。	○粘り強く根拠の適切さを考えて、相手に意見を伝えようとしている。
	4	○ICT端末を活用して構成メモに表し、自分の意見に合う構成の型を考える。	○意見と根拠に着目し、調べた情報と情報との関係について、理解している。	○表現の効果を考えて自分の考えが伝わる文章になるように構成を工夫している。	○根拠の適切さを考え意見を明確に伝えるための順序について、粘り強く考えようとしている。
広げ深める	5	○立場と根拠の関係や読み手の立場に立って表現を工夫する。	○読み手の立場に立って、効果的な文章表現を選んでいる。	○自分の考えが伝わる文章になるように工夫して書いている。	○自分の考えが伝わる意見文となるよう根拠の適切さを考えて書こうとしている。
まとめあげる	6	○意見文を友人と交流し、単元のまとめと振り返りをする。	○意見文を書く時の視点について理解している。	○意見文を書くときの視点について文章で表している。	○この学習を今後どのように活かすかを考えようとしている。

5 本時の指導

(1) 目標

- ・自分の意見を支えるための適切な根拠を選ぶことができる。 [知識及び技能]
- ・表現の効果を考えて、自分の考えが伝わる文章になるように構成を工夫することができる。 [思考力、判断力、表現力等]

(2) 教科研究仮説との関連

教科研究仮説

- ①見通しをもったり、振り返ったりする活動を計画的に取り入れれば、生徒は主体的に学習するだろう。
 ②一人一人が自分の考えを明確にするために、言葉による見方・考え方をはたらかせ、考えを形成する場や互いに学び合う場を設定すれば、主体的に学び表現する生徒が育つだろう。

①に関して、学習課題を明確にさせ、振り返りシートを活用することによって、この授業で何を学ぶのか、何を身に付けなければならないのかを明確にする習慣を付ける。

②に関して、「読み手」が誰かを明確にさせ「意見文として披露する」という見通しを持たせる。「自分たちの生活に直結する＝自分事として捉える」ことを通し、主体的に学び表現する生徒の育成を目指す。

(3) 展開 (6時間扱い 4時間目)

過程	時配 (形態)	学習活動と内容	○指導上の留意点・支援 ◎評価 ※研究との関連	教材 資料
見 い だ す	5分 (一斉)	1 前時の振り返りと本時の見通しをもつ。	○テーマに対して、どのような意見が出たかを発表する。	授業の記録 プリント
		自分の伝えたい意見に合う構成を考えよう		
自 分 で 取 り 組 む	10分 (個別)	2 賛成・反対の立場を決めて、「自分の意見を支える根拠」を書き出す。 <u>予想される生徒の反応</u> ・この文は「客観的な事実」と言えるのか？ ・この文は「意見と根拠をつなぐ考え」と言えるのか？	○「根拠となる事実」には、客観的な事実を、「事実から考えたこと」には、意見と根拠をつなぐ考えを書くことを確認する。 ・書けていない生徒には、事実なのか、考えなのかを助言する。(T2) ◎自分の意見を支えるための適切な根拠を、複数の根拠の中から選ぶことができる。(知識及び技能)	タブレット
広 げ 深 め る	20分 (グループ)	3 同じテーマを選んだクラスメートに読んでもらい、根拠が妥当かどうか助言をもらう。 <u>予想される生徒の反応</u> ・この文は「客観的な事実」ではなく「主観的な意見」ではないか。 ・この根拠では弱いので、別の根拠を持ってきたほうがよいのではないか。	○より説得力をもたせるための構成の型にも着目させる。 ・多角的な意見が出るように、話し合いが滞っているグループには助言をする。(T2)	タブレット
ま と め あ げ	12分 (個別)	4 「構成メモ」を作る。	○一文が長くなりすぎないように助言する。(80文字程度) (T2) ○メモを書き終えた生徒には、送信するように指示をする。 ◎表現の効果を考えて、自分	タブレット

る				
	3分 (個別)	5 「学習の記録」を書く。 <u>予想される生徒の反応</u> [まとめ] ・自分の考えを相手に印象づけるために双括型で書く。 ・自分の体験やその他の人の体験を客観的な事実として伝えるので尾括型で書く。 ・初めに自分の考えを宣言して、その後に事例を書くので頭括型にする。 ・相手を説得させるためには構成の中に「反論」を入れることが大切だ。 [振り返り] ・自分では妥当だと思っていた根拠でも読み手の経験や価値観の違いで意見を支えるまでにはいかないことが分かった。根拠に書き換えて友だちの意見を聞こうと思う。 ・根拠を集めているうちに、自分の考えが妥当なのかという疑問が出てきた。集めた根拠の共通点を探り、自分の考えを見直そうと思う。	の考えが伝わる文章になるように構成を工夫することができたか。 (思考力、判断力、表現力等) ○本時の学習についての「まとめと振り返り」を、自分の言葉で書かせることで、自分の思考を振り返らせる。 ○「まとめ」は本時の学習課題に対する答えであり、「振り返り」は本時の学習を終えて、自らの学びについてわかったことやそれに対する考察、仮説や結論について書かせる。	授業の記録

(4) 板書計画

